

明治文学展望

木村 毅



恒文社

〈著者略歴〉

木村 毅 (きむら・き)

評論家，作家，文学博士。

岡山県生まれ。早稲田大学英文科卒。

明治文化の研究に一貫して打ち込む一方，大正時代，中里介山の『大菩薩峠』を発掘，刊行。また，昭和初期の円本時代を開く文学全集刊行の創始者。明治文化研究会会員。早稲田大学百年史編集委員。文学博士。元神戸松蔭女子学院大学教授。主著に『小説研究十六講』ほか多数あり。

1979年9月18日，心不全のため東京・目黒区の東邦大付属大橋病院で死去，85歳。



©1982

明治文学展望

定価 1,900円

1982年1月31日 第1版第1刷発行

著者 木村 毅

発行者 池田 恒雄

発行所 株式会社 研文社

東京都千代田区神田錦町3-3

〒101 TEL03(291)7901

振替口座(東京)5-35824

印刷・鈴木整版 製本・飯塚製本

落丁，乱丁本はお取替え致します

ISBN 4-7704-0466-2 C1091

序

私は一昨年、明治文学断面の研究と傍題した『文芸東西南北』なる一書を公にした。この書はその姉妹巻と称すべきもので、その後諸雑誌や講座、講義録などに掲載したものを集めたのである。

文学の社会的研究、なかんずくそれが明治文学への適用は、何と言ってもプロレタリア文学進出以来で、ことに顕著になったのはこの兩三年來のことである。私のこの小著が、専門国文学者の乾燥な正統派的研究と違って、若干新味の掬すべきものがあるとすれば、主としてそれは、視点を社会的に拡大した点から由来しているであらう。もともとこの中に精算されねばならぬ挾雑物の非常に多く混在せる事は確かだが、それはその挾雑物を私自身が抱蔵しているための正直な反映だ。私は勇敢に、大胆に自分の精算に掛りたいと思っている。今後もし又この姉妹巻を公刊する事があつたら、それが根本的に面目を改めたものである事を密かに自ら期している次第である。ただ、この小著の中には、多少でも視点を変えたがために、従來の明治文学史、社会主義史から全く無視されていた重要事実を発見し得て、その訂正ないしは補遺を要求しているものも多少ある。たとえば一八九一年（明治二四年）酒井雄三郎氏がブリュセル開催のインターナシヨナ

ルに出席せる事実およびその時の記念撮影の発見などはいささか誇るに足ると思つてゐるし、マルクスの名と学説が明治一四、五年から伝わつてゐる事を紹介したのは、その後諸家の著述や年表にも多く引用されて、ほぼ公説となりつつあるようだ。

なお『越中富山薬売り奇譚』を本書に収めたについては首をひねる人もあろうが、私はこれを『書かれざる文学』として捨てかねたのである。また末尾に大正文学に関する言及の一、二篇あるは、明治文学が後継者に何を遺産したかを明らかにするため、これを欠いて決して彼女の全き姿は分るものではない。

挿画の中ではやはりインターナショナルの記念撮影は最も珍とせらるるであらう。これは酒井氏未亡人の手に残つていたのである。ついでには肥前島原江東寺（明治一五年東洋社会党結党の場所）が注目をひくと思つたが、これは去年の夏九州へ旅したついでに私がわざわざ寄つて写させておいたものである。表紙は大体『明六雜誌』の感じを出すようにと思つて作つてみた。朱印も同誌に用いられたままである。

なお本書を世に送るに當つて、私は第一に吉野作造、尾作竹猛、麿姓外骨氏などの催さるる明治文化研究会に深甚の感謝を捧げる。その会末に列するようになってから、この方面に関する私の知見は著しい進境を見せた。第二は柳田泉君と斎藤昌三君、前者はこの一、二年この方面の仕事を互いに扶け合つてきた共働者なるが故に。後者はその豊富なる材料を常に自由に使用をゆるしてくれたが故に。第三は改造社員なる浜本浩、広田義夫の両君、この書のかく纏まるに至つたのは一に両君の厚き斡旋による。思えばかかる微小の一著も、これら先輩友人の援助なくしては

決して日の目を見るには至らなかつたのだ。只、私は、この旧稿を全部書き改めたい意志をもっていたが、外遊を目の前に控えて、それを果たし得なかつたのが返す返すも遺憾である。この書の市場に出づる時、私は未だ恐らく渡航の途上にいるであらう。いや、あるいは既にロンドンの街衢を歩いてゐるかも知れぬ。

一九二八年五月一九日

木村 毅

目次

『明六雜誌』の文学記事	一三
一、刊行の経路——二、日本最初の英文学紹介——三、不明な良妻論——四、文学概論の縮図——五、雑誌と資本主義	
明治初期の虚無党文学	三九
一、類出せる虚無党文学——二、立志者の社会党小説——三、烈女ヴェラ・ザスウリッチに関する二書——四、虚無党退治奇談——五、マルクス最初の紹介者——六、二葉亭の『虚無党形気』	
『鬼啾々』解題	四五
一、迷宮に入れる原書——二、『地底のロシア』との対比——三、自由民権運動との関係——四、秘密出版入獄——五、本書の現代的意義	
探偵小説としての『楊牙児奇談』	五九

- 一、日本最初の探偵小説——二、その梗概——三、テクニクの解剖——四、本書の功績

明治翻訳文学の概観 七〇

- 一、前期総説——二、仏、英、蘭の先頭——三、種別の考察——四、訳壇の諸大家——五、詩壇名訳

『小説神髓』小論 七〇

- 一、別様の見地から——二、経済学と小説——三、著者の性格——四、歴史的位置——五、小説論としての諸条件

森田思軒とその翻訳 七四

- 一、略歴——二、思軒に対する批評——三、翻訳家としての思軒——四、思軒調——五、思軒の逸話——六、無産階級の立場から批評したユーゴー——七、思軒訳出の三篇——八、思軒とユーゴー

第一メーデーの報道者 七五

- 一、堺利彦氏の言葉——二、國民の友への通信——三、インターナショナルの最初の列席者——四、劇的な変死

社会小説研究……………一三五

- 一、緒言——二、『日本の未来』——三、民友社の『社会小説』——四、反対論・帝國文学と樗牛——五、賛成論——六、鷗外の紹介——七、早稲田文学の精算論——八、作品の欠如——九、内田不知庵の主張——一〇、高山樗牛の賛成論——一一、英独両系統——一二、諸作品の解題と批評——一三、結語

明治文学に現われたる自然美……………一六九

- 一、自然文人の区分——二、民友社派の基督教的自然観——三、ホトトギス派の写実精神——四、紀行文の隆興と衰頹——五、科学的研究と田園文学——六、ロ—カル・カラー——七、病床文人と外国人

『文学界』を中心にしての断想……………一八五

- 一、『文学界』を繙く——二、処女の純潔——三、『たけくらべ』のモデル——四、無視せられた劇詩——五、明治のトルバドール——六、『舞姫』の粉本——七、『エンデイミオン』の序

徳富蘆花……………二〇〇

- 一、面白くなかった『不如帰』——二、好きな『自然と人生』——三、子供を題材に

した小説——四、『黒潮』と『巡礼紀行』——五、柏屋の生活

擬森、鷗外与、永井荷風、書……………三〇

一、芥川君と会って——二、考証の杜撰——三、革命家とロマンチックとすね者と
——四、芸者小説よりカフェ小説へ

キツス雑考……………三〇

一、最初の思い出——二、珍訳いろいろ——三、翻訳文芸の功績

越中富山薬売り奇譚……………三〇

一、三越の珍商売——二、売薬先生の教化——三、凄い殺人事件——四、売薬と文
化の分布

大正文壇の精算……………三七

一、明治文化と大正文化——二、明治から大正へ——三、婦人運動の左右両翼——
四、自然主義の自己幻滅——五、自然主義の反動——六、「芸術資料としての遊蕩
生活」——七、『俺が』『俺は』『俺の』『俺に』の時代——八、デモクラシーと民衆
芸術——九、文壇成金時代——一〇、文芸家の生活問題

明治大正文学の社会的考察……………三五九

一、明治史即ちブルジョア權頭史——二、福沢諭吉とブルジョア・リベリズム——	三、自由民権論と政治小説——四、『小説神髓』と勸善懲惡思想——五、交錯せる
諸相——六、社会主義文学の發生——七、自然主義と自由思想——八、人道主義の	正体——九、現実主義の勝利——一〇、民主主義と民衆芸術——一一、プロレタリ
ア文学運動——一二、震災の影響——一三、新感覺派とコント
卷末補遺 二六六

木村毅——人と文学.....	尾崎 秀樹..... 二九七
----------------	----------------

挿画目次

- 一、「虚無党退治奇談」表紙
「婦女立志歐州美談」にあるヴェラ・ザスウリツチ法廷に立てる図…………… 一六
- 二、マルクスよりヴェラ・ザスウリツチに与えられた返翰の下書き…………… 一七
- 三、「楊牙児奇談」の表紙…………… 一八
- 四、ドストイェフスキーとイブセンの作を最も早く訳載した「同志社文学」の表紙…………… 一九
- 五、酒井雄三郎氏の出席した一八九一年のインターナショナル
パリ郊外にある酒井雄三郎氏の墓…………… 二〇
- 六、「病問録」の原稿…………… 二一
- 七、「文学界」創刊号の表紙…………… 二二
- 八、東洋社会党結党の場所、肥前島原の江東寺…………… 二三

明治文学展望

裝幀・本
田
進

『明治雜誌』の文学記事

一 刊行の経路

明治の雜誌の初めを『明六雜誌』となすことには何人も大体異議はあるまい。

もっとも明治四年の創刊に係る『新聞雜誌』があるが、これは記事の性質から言つて、ニュースを集めたのだから、やはり新聞と見るべきであろう。体裁は雜誌らしいが、明治初年の新聞は大抵この体裁だったので、そのためこれを雜誌と見なす理由にはならない。（廢姓外骨氏著『文明開化』新聞篇参照）

されば『愛書趣味』の『文芸雜誌年表』（齋藤昌三氏執筆）を見ても『明六雜誌』を頭首に掲げている。

『明六雜誌』は言うまでもなく明六社から発行された。しからばその明六社とは——？ それはその制規を見た方が理解が早い。

第一条 主旨

社ヲ設立スルノ主旨ハ我國ノ教育ヲ進メンカ為ニ有志ノ徒会同シテ其手段ヲ商議スルニ在リ。

又同志集會シテ異見ヲ交換シ知ヲ広メ識ヲ明ニスルニ在リ。

第二条 社名

社名ヲ呼ンテ明六社トス。(明治六年設立ノ縁ニ由ル)

次に、何が主因になつてかかる學術結社が出来たかは、雜誌発行後滿一カ年目に、森有礼のした演説で明らかである。

「明治六年七月、余亜米利加ヨリ歸テ、立社会同ノ事ヲ謀ル。諸君皆嘉シテ速ニ之ニ応シ、会谈三四回ヲ經テ社則設立ノ議興レリ。而テ其議遷延七年二月ニ及ヒ、始テ一体ス。其以前福沢諭吉君ヲ社長ニ選フノ議アリテ、社西村茂樹君ト余トニ委ネ、其旨ヲ同君ヘ致シテ之ヲ請ハシム。君固辭シテ許サス。此ニ於テ社之ヲ余ニ命ス。余敢テ辭セス、謹テ之ヲ承ケタリ」(明治二年二月發行、同誌三十号一丁。句点は新たに附加す。以下同じ)

これに依つて明六社設立は新帰朝の森有礼が主唱し、事實に於て彼がまたその統率者であつた事が分る。社員として名を連ねたものは西村茂樹、津田真道、西岡、中村正直、加藤弘之、箕作秋坪、福沢諭吉、杉亨二、箕作麟祥、森有礼の十人である。(多くの明治文学史にこの人数がまちまちになっているが、私は社の中心の森の演説から引用しているのであるから、これが最も正確であろう。ただ箕作麟祥のみは病を以て中途退社した)

この明六社が雑誌を出すに到つた因由は、これまた毎号の表紙裏に付けた宣言で明らかである。「頃日吾等蓋簪シ、或ハ事由ヲ論シ、或ハ異聞ヲ談シ、一ハ以テ学業ヲ研磨シ、一ハ以テ精神ヲ爽快ニス。其談論筆記スル所積テ冊ヲ成スニ及ヒ、之ヲ鍍行シ、以テ同好ノ志ニ頒ツ。鎖々タル小冊ナリト雖モ、邦人ノ為ニ知識ヲ開クノ一助ト為ラハ幸甚」